

鳥葬の山 レオン近くのテーブルマウンテン 02/11/09

古谷真之助

以下は、メキシコ・レオン市の現地法人に赴任時、仕事その他でたびたび訪れたアグアスカリエンテスに向かう途中の高速道路から見える、通称テーブルマウンテンの登山記。勤務先の日本人社員向けに書いていた日曜随筆の一つです。ちなみに、この随筆は全部で71編、A4で95ページになります。ご希望の方にはメールにて送付致します。メキシコにはわが国のような地形図は一般には販売されていないようで、地図は入手できませんでした。地図無しでの山行です。正確な高さも分かりません。ただし「標高」2000mを越えていることだけは確かです。なぜって、この高速道のあるあたり標高が既に1900m近くあるのですから…。



今回の山行に持参したものは以下のようなものです。笑われるかもしれませんが、山をよく知る人は、ましてや地図もなく、何が出てくるか分からない、こちらの山のこと、そして単独であることも考慮すると、自ずと慎重になります。

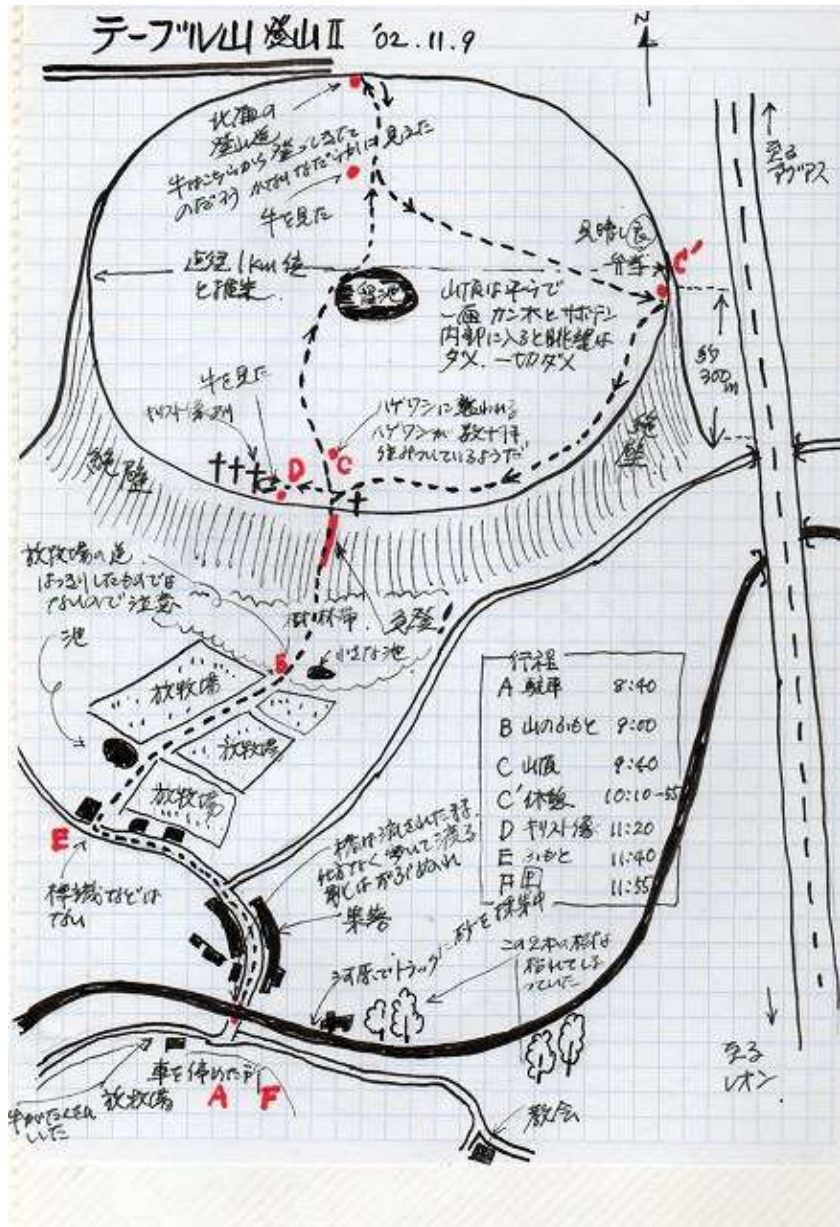
ハイキングシューズ、長袖シャツ、長ズボン、帽子、タオル、手袋、サングラス、防寒用の厚手のジャケット、傘、雨具上下、お昼の弁当、クッキー、チョコレート、キャンディ、水1.2リットル、ナイフ、ライター2個、マッチ、新聞紙、懐中電灯、予備電池、ファーストエイド、固定テープ(足を捻挫した時役に立ちます)消毒薬、



包帯など。携帯電話（通じるかどうか不安でしたが、ちゃんと通じました）双眼鏡、カメラ、メモ帳、スケッチ道具一式、そして煙草。

これだけの装備を持参すると、最低2晩は越せます。経験がありますから。それくらい山には慎重であるべきです。ハイキングでも慎重に、というのが私の山の持論。磁石も必携なのですが、地図がないことと、山容は事前に分かっていたし、日中は時計と太陽方位でほぼ正確に東西南北を知ることができるので省略。それに今、磁石は持っていないのです。

お弁当を作って、0740自宅出発。高速道を降りて当初駐車しようと思っていた地点には0820到着。前回と違って相変わらず道はガタガタですが、ぬかるんではおらず、何とか麓の村まで行けると判断して進みました。前回増水で断念した位置まで来ると、水位は各段に下がっていて、川沿いにしばし走ると集落に辿り着きました。対岸には川に向かって車道が下がっていますが、橋はありません。牛の番をしているおじいさんにジェスチャーで山を指し、ルート、アキ?と問うと、そうだと答えました。



川の中央、一番流れの速い所には簡易な鉄製の、長さ5m幅50cmの橋が掛かってはいますが、そこに到るまではジャブジャブと入っていかざるを得ません。

車を牛の群れの中に駐車し、準備体操をしてザックを背負い、川を渡りました。集落を通り過ぎると、朝起きの村人が怪訝な視線を送ってきます。にこにこ笑って「ブエノステ



ィアス」。うん、こうでなくっちゃ。

山道の取り付き地点が分かりません。それで、最後の家の人に聞きました。「石垣を越えてこっちに入って来い」道はあの方向だ、と指し示してくれました。放牧場を横切って踏み跡とおぼしき道を辿りました。牧場が終わり、樹林帯に入りました。でもほんの少し。そこを過ぎると草原に出ます。そこらで一休み。寄る

年波にはかないません。0900。美味しい煙草を吸い、熱いお茶を飲みました。

そこから次第に道は急坂になりました。予測はしていましたが、予測以上で息切れがします。一步一步が牛のようにのろい。脈拍はとくに限界を超えています。益々道は険しくなり、際どい登りが続きます。相当に気合を入れないととても登れない。ここで早くもハイキングは断念しました。婦女子を、そして子供を連れてくるなどとてもない。構想の甘さを痛感することしきり。こんな岩場を子供が通過できるはずも無いし、ご婦人方にもとても無理。仮にできたとしても下りが難関。ザイルで確保が必要と思ったのです。

ひいひい言いながら登りました。かつて日本アルプスのカモシカと言われた私も完璧に参りました。残る100mは必死でした。3点確保（手足4本のうちひとつだけを動かして確保できるしっかりした岩のホールドを探すこと）を繰り返してやっと山頂の台地に出ました。0940。駐車場からちょうど1時間です。



と、思ったら、いきなりコンドル（ハゲワシ？と思う）の洗礼です。麓から見上げた時にはトビがガグルを描いているとばかり思っていたのですが、それは何とコンドルなのでした。山頂の台地で息を整えていると、そのガグルが段々低くなって、こちらを伺っています。頭部は赤く、翼先は白、その他は黒です。それが私の出現に驚いたのか、バサバサと飛び立ち、頭上でぐるぐる回っているのです。気味が悪かったですね。おまけに、そこには十字架が4本立っており、ふと思い当たったのが、「鳥葬」です。



鳥葬とは、屍を高い山の頂に運び、後の始末は鳥に任せるという風習で、私の知る限りでは、ヒマラヤとアンデスで今でも行われているはずですが。それかと思いました。コンドルは低空飛行を繰り返して、ぜいぜいと息をつき、うずくまった私の死期をうかがっているようにも思えました。その数、数十羽……。

本当は、そこらで遅い朝飯兼昼食の予定でいたのですが、とてもそんな雰囲気ではありません。息が落ち着いてきたので、山頂台地を歩いてみることにしました。気味の悪いそこ

らを後にして、台地の中央部を目指しました。幸い踏跡らしきものがあるので、それを辿ると、台地のちょうど中央辺りと思われる所に直径10m位の池がありました。これには正直びっくりしました。コナン・ドイルの「ロスト・ワールド」のような世界がもしかしたら、もしかするのではないか、そんな期待が無かったかと言えば嘘になります。もちろん、この池に湧水があるとは思えません。水面は濃い緑の水藻に覆われていました。



(こんな山の上に、こんな池があるなんて。一瞬、信じられませんでした。水深は？ 分かりません)

そこを過ぎ、北を目指しました。とりあえず北方向を確認したかったのです。さらに踏跡を辿ると、突然牛に出くわしました。えっ？牛？という感じでした。なぜなら、あの急坂を牛が登れるとは思えないからです。牛も驚いたらしく、じっとこちらを伺っています。君子危うきに近寄らず。ほうほうの体でそこを後にしました。そこからはずっと藪をくぐり抜け、ついに北の絶壁に到りました。そして、そこには別の登山道がありました。南面の登山道と違って、ジグザグの登りです。これなら牛も登って来られるだろうと納得。ただし、子供にしろ、ご婦人にしろ大変な道であることには違いありません。この北面の登山道がどこから来ているか、そこから探ったのですが、よく分かりませんでした。この道を下れば確実に、そうすると駐車した



地点から相当遠くなる。それにそこに辿りつける保証もありません。即座に断念しました。山では何事も無理は禁物なのです。

アグアスに到る高速道路から見える、あの絶壁に立ちたいと思いました。元の道を引き返し、進路を東北東に取りました。ちょうど、その方向になぜか樹木が伐採してありました。山頂の台地を斜めに横切る形になります。変哲もないサボテンの大樹と、日本の高地に見られるダケカンバのような樹木がたくさん見られました。辺りは、このサボテン、ダケカンバ、そして棘のある名も知らぬ灌木に覆われていて、視界は一切ききません。そのルートを30分ばかり歩いて、東の絶壁の突端に立ちました。1010。

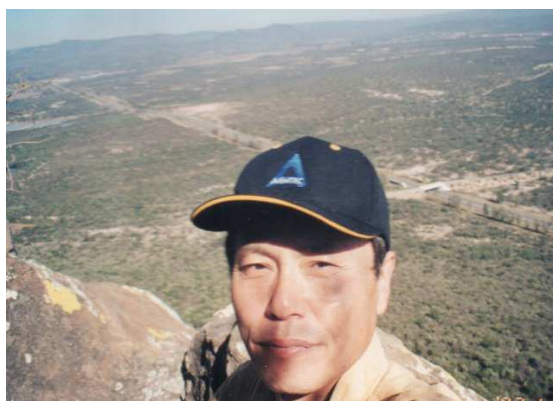


絶壁の端からは実に見事な眺望です。ああ、無理してひとりで来た甲斐があったと思ったものです。300m眼下にはアグアスに続く高速道が走り、遠くにはラゴス・デ・モレノの市街。遥か彼方には、レオンの北方に続くと思われる峰々。視線より下にコンドルが舞っています。絶壁は崩れやすい岩石で形成されており、その突端の突端に立つことは、ついにできませんでした。300mというのはもちろん目分量ですが、日頃グライダーから地上を眺めた時の経験から、そう判断したものです。まず間違っていないはずです。



そこから、今回の計画を事前に連絡していた前さん、平田さんに電話連絡しました。「眺め、いいぞー、今からメシだ」。絶壁の岩棚の上で、手製の弁当を広げました。小さなオ

ムスビ4個はあっという間にペロリ。山で食べるオムスビは本当に美味しいですね。腹が落ち着いたところで、まず煙草。熱いお茶をテルモスからたっぷり注ぎ飲む。これが山登りの至福の時でしょうか。眼下の景色、満ち足りた食欲、山の中にいる自分。そういう時の一服は、誰がどんなことを言おうと、体には良いのです。



そこで気づいたことですが、そこにはハエもいる、蚊もいる、（これはきっとあの牛のせいです）さっぱり風情がないな、と思っていたら、鮮やかな羽を持つ蝶が近寄ってきました。割に大型の蝶です。その他にも3種の蝶を見ました。昆虫で数が多かったのがバッタ。歩いているとザワザワするものが出て、最初トカゲかと思ったのですが、実態はこのバッタ。たくさんいましたねえ。

初めてこの山を見た時から是非登りたいと思っていました。なぜか。それは何と云っても、テーブル状のあの山容です。地形的には、この山はかつて台地だったものが、周囲が水によって侵食されて残ったものだと思っています。アメリカなどには多く見られる地形ですし、その最たるものは南米ギアナ高地です。ギアナ高地こそコナン・ドイルの「ロスト・ワールド」の舞台です。今の若い方には「ジュラシックパーク」と言った方が良いかもしれません。ま、あの映画はハワイをロケ地に選んでいます。少年の頃にこの小説を読んで、そういう場所があるのだろうか、などと思っていました。その後ギアナ高地を知るわけですが、あの特異な形状は、どうにも登ってみたいと思わせます。ましてや、もしかすると、そこにはギアナ高地のように下界と隔絶された全く異質の動植物世界が広がっているかも知れない（ま、そういうことはないわけですが、少なくともそう思わせる雰囲気は十分にある）のですから。また、向井君が言っていたように、映画「未知との遭遇」の場面も思い出すわけで、山頂台地には宇宙基地なんかがあってもおかしくない形状なのですから……。



ラゴス・デ・モレノを簡単にスケッチして、そろそろ移動することにしました。ざっと1時間足らず、ここで一人悦に入っていました。あれこれと思案していました。その内容は省きますが、山にいて、遠くを眺めながらあれこれ思いを巡らせるのは好きです。焚き火なんかあれば、もっと良い。と言うことで、ここを出た

のが1055。

そこからは絶壁沿いに完璧な藪コギ状態。言葉は悪いですが、女子供には無理です。所々で絶壁の縁まで行って、下を覗き込みました。私はグライダーで高い所に上がって喜んでいくせに実は高所恐怖症で、絶壁の突端に立つと足がガクガクしてくるのです。それでいてバンジージャンプも体験していますが、思うに、あれとこれとは全く別問題ですね。

そのあたりの絶壁からは、レオン方向の高速道、テーブルマウンテンの麓の村、そして川が見えます。もう、太陽はだいぶ高くなって、そちらの方向もはっきり見ることができました。

歩くこと、約30分。元の十字架のある場所に到着しました。もうコンドルはおらず、あの十字架を見に行ってみました。4本のうち、1本には立派なイエスの像が掲げてありました。その時に初めてイエス像に気付いたのですが、だとすると「鳥葬」というのは、あるいは私の邪推だったのかも知れません。何せあのコンドルは不気味でしたからねえ。さもなり何というところでしょうか。それに、元々コンドルという鳥は、そういう屍を漁って生きている鳥ですから、まあ、可能性は全くないわけではない、と今でも思っています。ただ、遺体をあのルートから運び上げるとしたら、いかな屈強な若者の力をして、容易ではないでしょう。しかし、しかし、だからこそ、ということも考えられます。



さて、いよいよ下山です。1120。予想通り、下りの方が神経を使いました。私は結構単独で山に入りますが、その時一番恐れているのは、足の骨折ないしは捻挫です。こうなるとまず動けない。命に別状なくても、山で自分の足で歩けなくなるほど怖いことはありません。滑落して死んだ時はもう本人には意識がないので苦しむことはありません。そして、そういう捻挫の類いは、どちらかという下りで発生することが多いのです。そういうことを常に考えて山に入ります。だから装備もおろそかにできない。単独の場合は、結局とりあえず自分しか頼れませんからね。奥深い山の中に一人いて捻挫して動けなくなったことなど考えたことなど、皆さんはないでしょう。私はサバイバルに関しては、相当の経験と知識を持っています。まあ、何と大袈裟な、と思われる方がおられるかも知れません。ただそういう人は、私に言わせれば、安易に山に入り、そして面倒を起こす人なのです。

急登は、今度は急な下りとなります。これが実は危ない。人間は、登りはどちらかという割に簡単にこなします。しかし下りはそうはいかない。慎重に下りました。しかし、その間わずか20分強。ロスト・ワールドからの脱出です。なだらかな草原に出て、牧場の柵を越え、車道に出ました。振り返り



り見ると、テーブル山は、やはり安易には登らせてくれない山のように思えました。あの絶壁は、一体どうしてできたものなのか。水の浸食ではなく、もしかすると、九州の万年山のように火山性の山なのかもしれない、そんなことも思ったのでした。

また、靴を濡らして川を渡り、駐車した車に辿り着きました。1155。ざっと3時間余りの山行でしたが、今まで経験にない色々な体験ができたのは大いなる収穫。ただ、翌日（これを書いている日曜日）のゴルフのスコアが散々だったのは、この疲れの所為だと言ったら、誰かサンが怒るだろうなァ。ともあれ、初めてこの山を見て以来の望みが果たせて大満足です。これでまたやり残したことがひとつ消えました。 (終)



(メキシコの私の住まいで行なったパーティに集まった日、墨、米人社員 中央後・古谷)

古谷メールアドレス shin-cas@c-able.ne.jp